“Call If You Need Me” から読む Carver の世界

加　藤　光　男

1　はじめに

Raymond Carver 最後の未発表作品 5 本が *Call If You Need Me* に収められて 2001 年 1 月に出版された。そのうちの 2 本 —— 表題作の “Call If You Need Me” と “What Would You Like to See？” はオハイオ州立大学図書館の「William Charvat アメリカ文学コレクション」のなかから発見されたものであり、あとの 3 本 “Kindling” “Dreams” “Vandals” は Carver の妻 Tess Gallagher が自宅でタイプ及び手書き原稿の入っているホールダーから発見したものである[1]。

今回発見された 5 作品のなかで “Call If You Need Me” と “What Would You Like to See？” は “two complete unpublished stories” で、Carver 以外の手は名前の整合性をとる以外加わっていない。その後 “Call If You Need Me” は *Granta* 68 号 (1999 年 12 月発行) に掲載され、ついで、*Best American Short Stories 2000*（2000 年 10 月発行、1999 年 1 月—2000 年 1 月に発表された短編小説から選考）に採用された。死後出版は作家みずからが出版したものと同一に取り扱っていいものかどうか判断は分かれるが、原稿の完成度とこのアンソロジーに収録されたことにより、鑑賞・評価の対象になる、という一つの見解が出たと見なしてよいであろう。

この 1999 年夏に発見された “Call If you Need Me” の執筆は 1980 年代初期と推定されているが[2]、読者の手に届いたのは次の順になる[3]。

1．*Granta* 68（1999 年 12 月）

2．*Best American Short Stories 2000*（2000 年 10 月）

3．*Call If You Need Me*（2001年1月）

"Call If You Need Me" は離婚寸前の夫婦が、一夏自分の家を離れ、他所に家を借りて二人だけで生活し、よりを戻そうとするが、結局駄目になってしまう物語である。両親の離婚を心配する一人息子も学資を貯めるために祖母のところで過ごすことになっている。三者三様に自分の人生を選択し、受容しなければならないさまが描かれ、現代アメリカの一断面が飾らない素直な文章で提示されている。その離婚を決意する最後の夜に霧のなかから放れ馬の群が庭に現れ、二人の深刻な雰囲気をつかの間和ませてくれるエピソードが物語に神秘的な魅力を与えている、完成した作品である。

しかし、これと同様のテーマとエピソードはすでに発表されている詩 "Late Night with Fog and Horses"(1985)[4] と短編小説 "Blackbird Pie"(1986)[5] とに使われている。Carver は詩を最初に書き、そのあとで短編小説にかかり[6]、さらに、彼の場合推考は30回にまで及ぶことがあるという[7]。Carver はどうして "Call If You Need Me" を原稿のままにし、"Blackbird Pie" を発表したのであろうか。その解答は今更求めることはできないが、"Blackbird Pie" とは手法が異なるとしても、"Call If You Need Me" の短編小説としての完成度を見るにつけ、その疑問が湧いてくる。小論では "Call If You Need Me" の鑑賞をもとにして、"Blackbird Pie" と構成、焦点としているもの、執筆の姿勢、手法などを比較し、さらにその原点となっている詩 "Late Night with Fog and Horses" にも考察を加える。

2 "Call If You Need Me"

この短い作品の冒頭のパラグラフから Carver の世界が穏やかに展開される。もう破局を向かえている大学教授夫妻の出直しをかけた夏の旅行。夫にも愛人がいて、その妻 Nancy も夫の同僚教師と恋愛関係にある。Palo Alto の家は貸し、カリフォルニア北部の海岸町 Eureca に家を借りることにした。彼らに

は高校が終わった一人息子 Richard がいて、彼は妻の母親の田舎で農場のアルバイトをし、休みが終わったら、大学に入ることになっている。高校を卒業した翌日息子をバス停まで送り、息子と別れる場面が最初のパラグラフ中約 1 ページにわたって淡々と描かれる。

> Our son, Richard, went to Nancy's grandmother's place in Pasco, Washington, to live for the summer and work toward saving money for college in the fall. His grandmother knew the situation at home and had begun working on getting him up there and locating him a job long before his arrival. She'd talked to a farmer friend of hers and had secured a promise of work for Richard baling hay and building fences. Hard work, but Richard was looking forward to it. (63) (underline mine)

ナレーターは父親であり、下線部における息子の気持ちは、息子が両親に言っている言葉を拾ったものであろう。それを言葉どおりに受け取っていいものかどうか、それに続く二人の会話から判断してみたい。

このあと、バス駅に着き切符を買ってやり、二人はベンチに坐ってバスを待っている。駅に来るまでの車のなかでこんなやりとりがある。息子は “Are you and Mom going to get a divorce？” と聞く。もう既に二人の間がおかしい、と息子にはわかっているのだ。そうしないためにこの休み中もう一度努力してみるのだ、という父親の説明のあと、息子はさらに “You still love Mom？” と問い、“She told me she loves you.” とつづける。父親はもちろんと答え、この旅行の大切さを話し、息子にはきちんと働き金を貯めるように、そして休みなんだから楽しむようにとも言い、釣りの話になる。父親らしい心遣いが感じられる。そして、息子もそれに調子を合わせ、“Waterskiing, too,” “I want to learn to water-ski.” と言い、父親は自分の分までやってきてくれと言う。

やがてバスのアナウンスがあり別れるとき、父親は “Don't worry, don't worry. Where's your ticket？” と父親らしい思いやりを示し、以下のような描写が続く。

He patted his coat pocket and then picked up his suitcase. I walked him over to where the line was forming in the terminal, then I embraced him again and kissed him on the cheek and said good-bye.

"Good-bye, Dad," he said, and turned from me so I wouldn't see his tears. (64)

この最後の涙を隠す仕草のなんといじらしいことか。この素直さ、いじらしさは、せいぜい中学生の対応であり、とても彼がアメリカの大学入学を控えている年の男の子であるとは、考えられないくらいである。彼は、自分がもっと両親に迷惑をかけずにきちんとしていたら、離婚なんてことにはならないかもしれない。両親の不仲に自分も関係があったのかもしれない、だから、この大切な夏、家族がそれぞれバラバラになることに何の異論もなく賛成し、喜んでいる素振りをしているのかもしれないのだ。そして、ナレーターが父親であることを考えると、彼も息子の気持ち、涙の持つ意味は痛いほど分かっているはずである。このように見てくると、下線をした部分の表現にはいくつもの意味が隠されている。このように、この物語の導入部は非常に良くできていて、読者はすっかり物語にのめり込んでしまう。

ここまでがこの短編の書き出しで、父親は真剣に妻との関係の修復を考えているかに思える。しかし、その思いは、それに続くパラグラフでどうやら怪しくなってくる。というのは、夏の間借りる家を探しに行くとき関係を持っている女性 Susan と一緒だったことがわかるからである。とにかく、この浮気がすべての始まりで、それがばれてから妻は同僚と会うようになったのである(64-65)。

妻 Nancy に目を転じると、彼女はバス停には来なかったが、すでに息子との別れを終えていたことが、冒頭のパラグラフでわかる。

His mother had already held him and cried and kissed him good-bye and given him a long letter upon his arrival. She was at home

now finishing last-minute packing for our own move and waiting for the couple who were to take our house. (63)

息子と一夏別れるだけで泣くのは大げさではないかと思われる。そこには何らかの破局を想像してしまう展開があったことや、夫婦関係が修復不可能なことを女性らしく直感していたことが、見えてくる。その思いは、避暑地に行く途中、昼食を食べに寄ったカフェでのエピソードでも強まる。

Nancy の人差し指の動きと夫がたばこをふかしているさまが描かれる。

After we had ordered coffee and sandwiches, Nancy touched her forefinger to the table and began tracing lines in the wood. I lit a cigarette and looked outside. (66)

この所在なげなさまはなんと空漠としていることか。話すことがないのか、悲しい現実を見せている。それにつづくハミングバードの場面は、もっと重い意味合いが読める。

"Now, that's a good sign, I think." I said. "Hummingbirds. Hummingbirds are supposed to bring luck."

"I've heard that somewhere," she said. "I don't know where I heard that, but I've heard it. Well," She said, "luck is what we could use. Wouldn't you say?" (67)

夫は事態をまだまだ楽天的に曖昧にしか考えていないようで、hummingbird の持つ象徴性については特になにも考えていないように見える。しかし、妻はもっと真剣で、幸運の女神が微笑まなければ、彼らの間は終わりなのだと直感しているのである。

目的地はすばらしい景色、環境にあり、借家は立派だし、シーツなどまで清潔であり問題はない。家に到着した Nancy は "I'm glad we're here." と言い、さらに、次のようなシーンがある。

She looked at me, and said, "I'm glad we're here."

"So am I," I said. I opened my arms and she moved to me. I held her. I could feel her trembling. I turned her face up and

kissed her on either cheek. "Nancy," I said.

"I'm glad we're here." (68)

「ふるえている」彼女の心情を推し量ることは難しいが、これは実際にやり直しが始まろうとしている瞬間である。彼女の方が、交際相手のことを思い、抱擁の意味を真剣に考えているのかもしれないし、新しい方向性に期待しているのかもしれない。ただ、彼女は「来てよかった」と三度も言う。彼女は自らに言い聞かせつつ、あらためて真剣に努力してみようと決心したのであろう。

そして、彼らは避暑に来た普通の夫婦のように様々に楽しんだ。少なくとも夫には楽しんでいるように見えた。しかし、突然彼女は、"I mean it isn't going to work. Let's face it." と言い出す。どうしてそんなことを言い出すのかという質問に対して、堰を切ったように思いの丈をぶつける。

"I mean it isn't going to work. Let's face it." She shook her head again. "I don't think I want to go fishing in the morning, either, and I don't want a dog. No, no dogs. I think I want to go up and see my mother and Richard. Alone. I want to be alone. I miss Richard," she said and began to cry. "Richard my son, my baby," she said, "and he's nearly grown and gone. I miss him." (70)

これにより Eureka で始めたやり直しの生活は、現実を見ない偽りの生活でしかないと考えている妻の様子が手に取るように分かる。夫がつい、ボーイフレンドにも会いたいのだろう、と言った後の妻の言葉から彼女の思いがもっと深刻であることがわかる。

"I miss everybody tonight," she said. "I miss you too. I've missed you for a long time now. I've missed you so much you've gotten lost somehow, I can't explain it. I've lost you. You're not mine any longer." (70)

彼女は、夫との間には距離ができて、目の前にいる夫ではなくて昔の恋しかった夫を懐かしんでいる。完全に二人はお互いを見失っている、という現実に相対したのだ。妻は、女性の直感で二人とも現在の恋人とは離れられず、"We're

not going to make it.” と、結婚生活は終わっていることをはっきりと言う。そして最終的に翌日の朝母親のところに行くことを告げる。最初からの予感が的中してしまったのである。ここに来てからの生活は彼女にとっては実体のない幻想でしかなかった。決して、幸運も微笑まなかったし、夫との愛情も復活することはなかったのである。

そして、妻がシャワーに入っている間、夫は Susan のことを思い始める。Nancy に促される形で彼も自分の本心を見極めることができた。すなわち、Susan がこれからの人生をともにする人なのだと彼は決心したのである。彼の思いは、妻の意志がこの家庭を続けることであればそれでも良いし、もし、別れたいのならそれでも良いという、きわめて曖昧なものであったとしか思えない。しかし、息子に言ったことも、妻に言ったことも、妻とのこの避暑地での生活も本当の気持ちであったのではなかろうか。彼には、自分の意志をはっきりと妻に言いきれない弱さ、ないしはやさしさや、すべて自分が悪いのだという後ろめたさがある。もしかしたら下部意識には、愛人との関係は清算しないで、家庭はそのままに続けるという気持ち、あるいはもっとずるくそのような下心があったのかもしれない。しかし、それさえも彼には不明であっただろう。判断する力も、意志もない状態で、どのような選択も彼にとっては本心と言えるものであった。やさしさとその裏返しの愚図な気持ち。言い換えると、彼には現実に直面する力がなかったのである。その葛藤は描かれていない。描かれる必要はないだろう。やさしくて、優柔不断、憎めない愚図で結果的にずるい。それだけの人物なのである。

この、やりきれない閉塞状況のなかで夢のような白馬の場面になり、流れるような描写が続く。

> Then I showered, dressed in my pajamas, and went to sit near the fireplace again. The fog was outside the window now. I sat in front of the fire and smoked. When I looked out the window again, something moved in the fog and I saw a horse grazing in the front yard.

I went to the window. The horse looked up at me for a minute, then went back to pulling up grass. Another horse walked past the car into the yard and began to graze. I turned on the porch light and stood at the window and watched them. They were big white horses with long manes. They'd gotten through a fence or an unlocked gate from one of the nearby farms. Somehow they'd wound up in our front yard. They were larking it, enjoying their breakaway immensely. But nervous, too; I could see the whites of their eyes from where I stood behind the window. Their ears kept rising and falling as they tore out clumps of grass. A third horse wandered into the yard, and then a forth. It was a herd of white horses, and they were grazing in our front yard. (71)

夫は寝室で寝ていた妻を起こす。二人はなにもなかったごく普通の夫婦であるかのように窓から迷い馬の様子を見、そして庭に出る。彼女はたてがみを撫でながら馬に話しかける。"Horsey, where'd you come from?" "Where do you live and why are you out tonight, Horsey?" (72) 彼女は美しい迷い馬に自分を投影しているのであろうか。夫が警察に電話をするのを少し待ってと言って、馬と戯れている。警察と馬の持ち主が来て、馬をつれていってから、外は霧の中、彼らはコーヒーを入れ、たくさん話をし、深夜の音楽放送を聴き、ダンスをし、パラグラフの最後は次のように結ばれる。"Toward daylight I turned off the radio and we went to bed and made love." (73)

二人のやりきれない幕切れが近づいていたのに、霧の中に現れた迷い馬の群により思わぬ展開となった。白馬が、彼らの心の深いところで何かを変えてくれた。別れが避けられないものであったとしても、それを甘美な思い出に、そして彼らのかけがえのない歴史を救ってくれたのである。白馬の群が彼らのもっとも必要としていた幸運の女神であったのだ。動物、自然の持つ治癒力によって、二人、とくに彼女のかたくなな気持ちは癒されたのである。

翌朝空港に妻を送っていく。そして、決して上辺だけではない心からの別れ

が待っている。しかし、それはさりげないものであり、長い間暮らした夫婦の離別であるはずが、ちょっとの間どこかに出かける夫婦か恋人のような別れである。

"Tell your mother I said hello. Give Richard a hug for me and tell him I miss him," I said. "Tell him I send love."

"He loves you too," she said "You know that. In any case, you'll see him in the fall, I'm sure."

I nodded.

"Good-bye," she said, and reached for me. We held each other. "I'm glad for last night," she said. "Those horses. Our talk. Everything. It helps. We won't forget that," she said. She began to cry.

"Write me, will you?" I said. "I didn't think it would happen to us," I said. "All those years. I never thought so for a minute. Not us."

"I'll write," she said. "Some big letters. The biggest you've ever seen since I used to send you letters in high school."

"I'll be looking for them," I said. (73-74)

このように納得してのやさしい別れがあり、彼らをそのように導いてくれたのは迷い馬であり、その夜のことは生涯忘れることはないであろう。そして、"Then I went into the house and , without even taking off my coat, went to the telephone and dialed Susan's number."、と空港から帰った彼が Susan に電話するところで、この物語は唐突に終わってしまう。

最終場面の完結性については議論があることころであろう。しかし、結論はもう出ていて、それ以上筆を加える必要がないと言うことができる。読者が思い出さなければならないのは、Nancy とやり直しの旅行に出る 3 週間前、Susan と借家を探しに行ったとき、Susan にしてもこれが別れの旅になるかもしれないことは、当然わかっていたことである。その、3 夜同じモーテルに泊

まっているとき、Susan が次のように言う場面がある。

> "I envy your wife. I envy Nancy. You hear people talk about 'the other woman' always and how the incumbent wife has the privileges and the real power, but I never really understood or cared about those things before. Now I see. I envy her. I envy her the life she will have with you in that house this summer. I wish it were me. I wish it were us. Oh, how I wish it were us. I feel so crummy," she said. I stroked her hair. (65)

この場面は、彼が彼女の髪をなで、なだめるだけで終わっている。これが彼のやさしさなのであろうが、煮え切らない性質でもある。もしかしたら、Susan にもこの夫の性質は判っていて、彼との関係が完全に切れてしまうことはないだろう、と見越していたかのようである。結局、彼はこの恋人 Susan とは別れることはできなかったのであり、Nancy にもこうなるであろう夫の心の動きが読めていた。

> "I want to fly up and see my mother and Richard tomorrow. After I'm gone you can call your girlfriend."
>
> "I won't do that," I said, "I have no intention of doing that."
>
> "You'll call her," she said. (70)

これは彼らが別れを決定した夜の会話であり、この Nancy の予言どおりになったのである。このように、この唐突に思える最後の扱いは読者を納得させるものになっているのである。

もう一度この最終場面に至るまでを振り返ってみると、この家族、妻の Nancy は同僚の Del Shraeder に心が完全に移ってしまっている。だからこそ、息子の Richard に対する母親としての特別な思いが初めから描かれている。態度のはっきりしないように見える夫のぐずついた煮え切らない態度は、やさしさの裏返しの感情である。しかし、Nancy の決断で踏ん切りはついた。Richard はこの離婚によって傷つくであろう。しかし、たくさんの離婚家庭の子供たちのように、健気に乗り切っていくのであろう。アメリカ社会のよくある一シー

ンが描き切られている。三者三様の気持ちがよく描かれていて、読者を引きつけ、十分に満足させる立派な作品に仕上がっている。たくさんのことを考えさせる行き届いた筋立てと場面構成。息子との別れのみごとな仕上がり、白馬のエピソードの神秘的な美しさとそれでいて決して作り物であることを感じさせない筆力。Hemingway ばりの淡々とした語り口。物語の流れによどみがなく、どこにも気になる過不足もない。どこを取り上げても一流の作品である。

3 “Blackbird Pie”

“Call If You Need Me” は Carver がもしこの作品を手放さずにいて、さらに手を加えていたとすれば、という「もし」を何個も積み上げれば、現在とはちがう形の作品になっていたかもしれないが、それはまったく考える必要がない立派な仕上がりの作品であることを見てきた。そこで、これがどうして闇に葬られ、“Blackbird Pie” が日の目を見たのであろうか。いくつかの仮説を考えてみることができる。

この作品が世に出た頃、Carver は大学で文学の授業を持ち、文壇にあってもそれなりの地位を得ていた。そこで、このテーマをもう少し別な形で追求してみたかったのではあるまいか。“Call If You Need Me” は伝統的な手法の作品である。そして、彼が尊敬してきた Hemingway の影響が見られる作品である。その文体の単純さ、用いられている語彙の平明さ、そして、Susan にしても Nancy にしてもその描写に “Cat in the Rain” で、本ばかり読んでいて自分を相手にしてくれない夫に不満を爆発させるアメリカ女性を思い出させることなども気づく。

次に、この作品の方が心情的に Carver の現実の生活により近かったのではあるまいか。糟糠の妻との別れ、そして Tess Gallagher との共同生活(と再婚)。子供たちとの別れなど、いわゆる彼にとっては生々しいことが多かったのではあるまいか。Carver は身の回りのことを作品に取り入れていたといわれるが、

"Blackbird Pie" ではそれをフィクション化する際に、技巧上かなり変形を加えていた。素材を作品として醸成するのに相当の精力を注ぎ込み、フィクションとしての完成度に自信があったのではないだろうか。これは、post-modern の動きの中で伝統的な小説を越える技法が発展してきていて、それに敏感に反応しているとも考えられる。いずれも推測なので、これ以上の議論にはならないが、"Blackbird Pie" の内容を分析しておくことがまず必要であると思う。

"Blackbird Pie" は、ナレーターである夫 (私) が、突然妻から手紙の形で一方的に離婚を突きつけられ動揺しているという場面から始まる。それは、今では過去の出来事であるが、未だかってそれが彼女の手になる手紙なのか、代筆してもらったものなのか不明である。現在その手紙はもう存在していないので今更確かめることはできないが、彼は記憶力が抜群なので、それを再現するのである。そして、手紙の内容については争いようのない事実であるらしく、それよりは、筆跡と妻なら決してやらないアンダーラインの使用を問題とする。この手紙について書かれている冒頭のパラグラフがこの短編の性格を決定している。

> My name was written on the envelope, and what was inside purported to be a letter from my wife. I say "purported" because even though the grievances could only have come from someone who'd spent twenty-three years observing me on an intimate, day-to-day basis, the charges were outrageous and completely out of keeping with my wife's character. Most important, however, the handwriting was not my wife's handwriting. But if it wasn't her handwriting, then whose was it? (491)

このように筆跡についての分析が始まる。

夫は病気を患っていたので現在仕事がたまっている。病気については精神的疾患なのかあるいは別のことなのか、それ以上触れられていない。読み進むうちに、彼が感情的になっていく様子が描かれ、手紙も冷静に最後まで読むことができない。何か後ろめたさがあるのか、話し合いでは絶対に負けてしまうと

いう思いこみもあるようである。妻の論理に対して、真っ向から闘うことができないようで、正面衝突を避けている。意を決して妻のいる居間のところまで行くが、妻が電話をしているのを耳にし、手紙を代筆した愛人との電話であると勘違いして（それは早とちりで、放れ馬のことを警察に電話していたことが後で判るのだが)、自分の部屋に逃げ帰ってしまう。

そこで、持ち出したのがアンダーラインのことである。

> I read this far and stopped. Something was fishy in Denmark. The sentiments expressed in the letter may have belonged to my wife. (Maybe they did. Say they did, grant that the sentiments expressed *were* hers.) But the handwriting *was not her handwriting*. And I ought to know. And yet if it wasn't her handwriting, who on earth *had* written these lines? (494)

しかし後になって、ナレーターは、アンダーラインを引く習慣がなくても、何かの拍子に引いてしまうことがあるかもしれない、と言い出す。記憶力が良いと言い募るナレーター自身に胡散臭さがつきまとう。とにかく、この夫には妻に逃げられるだけの原因があるようであり、“Call If You Need Me” ではあれだけ感動的であった放れ馬のエピソードも、ここでは別れることになっている二人には何の作用も及ぼさない。結局、真実は判らずじまいであり、夫婦の歴史を記憶の彼方におしやるつらい作業を最後の最後まで手紙の謎解きで紛らせてしまう。そして、最終場面でその感情を大げさな言葉にせざるを得ないことになる。最後まで手紙の内容ではなく、筆跡にこだわらざるを得ない男の寂しさ、悲しさ、そして虚しさが先に立つ作品に仕上がっている。

ここで推測されるのは、やはりこのナレーターである夫は精神を病んだ経歴があり、現在は回復し、仕事を始めてはいるが、まだまだ正常時の自分に戻ってはいない。そのような状態での妻との別れが描かれているのである。妻の手紙にあるように、仕事が忙しくなり、一緒に過ごす時間が少なくなった。しかし、子供たちが家をでて、お互い話す時間ができたときには話すことがなくなっていた、という妻の言葉が重くのしかかっている（494)。

そして、放れ馬の場面で、夫がいったいどうなっているのだと問いつめると、

> "There was this girl, you see. Are you listening? And this girl loved this boy so much. She loved him even more than herself. But the boy — well, he grew up. I don't know what happened to him. Something, anyway. He got cruel without meaning to be cruel and he —" (503)

と語り始めるが、彼はそれを最後まで聞いていることができなかった。おとぎ話のように語られた妻の心情は美しい。そして、残された道は離婚しかないことを妻からきっぱりと告げられ、別れがやってくる。夫はついに、"Don't leave me like this. [...] I don't know what I'll do." (508) と、偽らざる心情を口にする。しかし、彼女の答えは同じで、こうするしかない。すべて手紙の中に書かれている、というものである (508)。一つの物語、一つの歴史の終わりであり、ここには次の物語は書かれていない。精神を病み、偏執症的になり、妻に去られる孤独な男の物語である。

しかし、"Blackbird Pie" は読者を納得させ、感動させる事ができない。最大の問題点は、謎解きが完了していないことであろう。ミステリーであれば、その解決が最大の楽しみなのであるが、これはミステリーではない。このような "Blackbird Pie" を残したのは Carver が新しい方向を模索している時の実験的作品であったからであろう。

それを理解するためには、ナレーターの言説に多くの疑問が残るとしても、その明らかにならない部分を含めて鑑賞する必要がある。Adam Meyer によると、混乱を極めているナレーターについて、"The narrator is in fact the one who has left the record, and it is indeed full of 'scraps and tirades.'" (159) と言いきる。結局、その手紙はそもそもナレーターの手になるもの、言い換えると彼の頭の中に描いたものであるとする。しかし、これは、別れるときの妻の言葉の中で否定されている。妻はバス停まで車で送っていってくれるように書いていたことを彼に告げ、全部は読まなかったでしょう、と看破する件の説明がつかない。これも彼の妄想の中であるとすると全体の構成が根底から崩れ

ることになる。また、Kirk Nesset は、“‘Blackbird Pie’ is mildly expressionistic in style, a strange account of a man waking up one fine morning to find himself divorced.” (83) と、この作品はリアリズムを越え、表現主義的であると言う。いずれの読みもその背景には、離婚を突きつける妻の手紙に関するナレーターの執拗なそして辻褄の合わない分析があるからである。この点について、Randolph Paul Runyon によるメタフィクション的要素についての克明な研究が一つの方向性を示している (187-205)。以下に引用するように、ナレーターの言動に注意し出すと、それはもう「メタフィクションの階段」を上っているのである。

> If we have our doubts about the reliability of the narrator of “Blackbird Pie,” we can perhaps move to safer ground, up the metafictional ladder, to try to read the text in the story for which we can have some confidence that Carver, and not the troubled fictive husband, is responsible. (200)

もう一度、物語の要点をまとめると次のようになる。妻からの手紙がきっかけとなって、ナレーターが、現実の状況と、自分の幻想ないしは妄想の部分とを区別せずに、前言を翻すようなことをあえて言い続ける。それは、自分の立場、過去に妻に与えた苦痛、自分の病歴などどうしようもない立場の弱さを理解している者の感情である。さらに、妻がいなければどうにもならない自分を置いていって欲しくない、という哀願ともいえる強い感情をもち、手紙の真実性をあくまでも認めたくない自己が存在している。それが、その手紙の信憑性ということにこだわらせ、自分をいささかでも正当化しようとしているのである。物語の最後にはそれを乗り越えたかに見えるのだが、彼女を取り去ると彼の歴史、彼がこの世に存在した証明はなくなってしまうという、悲痛とも思える結論に至るのである。

取り上げられている表現主義といい、あるいはメタフィクションであるといい、それぞれの批評家が切り口にしているところに従えば、複雑な技巧を用いた “Blackbird Pie” はカーヴァーの作品の中で、相当の位置を占めている成熟

した作品である。Adam Meyer は次のように評価している。

> "The element that makes the story most memorable among Carver's later works is the narrator himself, a man who appears to be both incredibly smart and incredibly stupid at the same time." (157)

この点で、"Blackbird Pie" は新しく発見された第三の作品 "Call If You Need Me" とは全く趣を異にしている。村上春樹は "Call If You Need Me" を評価していないようである (191)。"Blackbird Pie" の「そのような」完成度の高さに価値を置き、その点では非常にあっさりと描かれていている第三の作品を新しい試みをしていない、本来であればまだまだ推敲が重ねられるはずの未熟な作品であるという印象をぬぐい去れないようである。

"Blackbird Pie" のナレーターに起因する解決を見ないストーリー展開にメタフィクション的傾向を見ていた Runyon は、さらに、Carver の作品にはテキスト相互間 (intertextual) で相似している (juxterposition) ものが多数存在することを指摘し、その事実によっても、次に引用するように、Carver は自分の短編小説の世界で作品相互間での可能性を探る、という新しいメタフィクション的方向に向かっていたことが明瞭である、と述べている。

> Whatever shape the unfinished volume of stories might have assumed, it is evident that Carver was — with the letter slipped under the door, that instructive text within the text — <u>moving in the direction of an even greater metafictionality</u>, and toward new ways of exploring the possibilities of the intratextual short story collection. (205) (underline mine)

この考察はテキスト間での比較についてであるが、この Runyon の研究は "Call If You Need Me" の出版より以前のものであり、まったくこの作品についての言及はない。ただ、今回の "Call If You Need Me" の出現によって、同一テーマによる 3 作品が出るということになり、Carver の考えてもいない方向へこれらの作品の読みは動いていく可能性を秘めている。

4 “Late Night with Fog and Horses”

Carver によれば、同一テーマの作品を書くときに詩が最初にできて、その後で短編小説にかかるというが、小論ではそれを逆にたどる形になった。“Late Night with Fog and Horses” を一読してまず言えることは、様々なシーンが秘められ、そして人間性が赤裸々に描かれているが、ストーリーがきちんとしていて、やさしさがかいま見られ、良い出来映えの詩であると評価できる。

ナレーターは夫である「私」である。もう別れ話が終わったところから詩は始まる。主体的に別れ話を持ち出しているのはどうやら私の方で、放れ馬のことで警察に電話をかける時、早速愛人にも電話をする。詩では多くのエピソードを書き込めないので、物語性の点では不利であるが、逆に詩では読者の想像力をかき立てる様々な示唆を忍ばせることができるので、かなりのことが読めてくる。自分たちの歴史を葬り、方向を決めてしまった二人。深い霧の中に放れ馬の群を見て、外に行くのは妻だけであり、泣きながら馬と戯れる妻は可憐である。その妻を見ながら愛人に電話をかける夫は電話が終わってから、妻のところに行く。そこで、二人は一緒に馬に語りかける。

馬が連れ去られてから二人は長い間話をし、朝を迎える。

At the end of that long night,
when they finally put their arms around
each other, their embrace was full of
passion and memory. Each recalled
the other’s youth. Now something had ended,
something else rushing in to take its place.
Came the moment of leave-taking itself.
“Goodbye, go on,” she said.
And the pulling away. (100)

やはり、馬の出現によって彼らは「情熱と、思い出に満ちた抱擁」をし、穏や

かな別れができたのである。それは「一つの終わりであり」、もう一つの始まりでもあった。そして彼が思い出すのは、あのときかけた愛人への電話である。多分、それは楽しいものであったろう、しかし、それは「何もかも台無しにする電話」でもあったのだ。

Much later,
he remembered making a disastrous phone call.
One that had hung on and hung on,
a malediction. It's boiled down
to that. The rest of his life.
Malediction. (101)

この「ずっと後になって」と言う部分は短編には出てこない。いわゆる「物語のその後」になるわけで、普通は読者の想像に任される部分である。それを、冷静に振り返っているのである。malediction は、後になってからの自省の言葉である。愛人に電話を掛けたことは「呪われているような」、「神から祝福されない」行為であった。そしてその後の人生もまたそのようなものであった。それは、「結局あのときの電話にいきつくのだ」。馬の出現によって救われ、妻ときちんと別れ、愛人との新しい歩みを始めたが、それはどこかでうまくいっていないのかもしれない。新しい歴史を描いてきた一人の男の一つの姿が見えてくる。

ここには、この詩の後で執筆された "Blackbird Pie" と "Call If You Need Me" には描かれていない「その後」が描かれている。同じテーマを用いているのだが、前者では妻との別れの場面がクローズアップされ、後者では、結果的に malediction に結びつく「電話」の場面までに焦点が当てられている。このように Carver は詩から短編、そして短編から詩と自由に発想でき、しかもいずれの作品もそれなりの格調をそなえている。それは扱っている素材が身近なものであることにも関係しているであろう。

Carver は自分の身の回りで起こったどんな些細なことでもそれを作品のな

かで使ったと言われる。それはどの作家にとっても同じことであろうが、この3作品を見るとその使い方が全く違う。しかしその根底にある材料はどうしようもなく同じである。そしてそれは、彼の人生の節目節目の重要な出来事にも符合していたと思われる。この作品を彼の実人生なかにはめてみると、どの時期のことを描いているのかよく見えてくる。

彼が、結婚したのは1957年19歳のとき、67年には破産、ようやく創作が認められて72年からは大学で講義を持つようになる。しかし、74年にはアルコール依存症になり、職を辞し2度目の破産申告。76年には妻と別居、77年に Tess Gallagher と出会う。78年に妻と試験的に同居をしたがすぐに別れる。そして、Gallagher との交際が深くなり79年には同居をはじめる。

この試験的に同居というのが、これら3作品の舞台であろう。この間のことを客観的に見られるようになったのが、80年代に入ってからで、それが85年に作品となって世に出たと考えられる[8]。だから、いずれの作品も虚構であるとはいえ、事実がちりばめられているし、彼の本音が入っているわけである。

妻の Maryann は、離婚してからも毎週のように彼に手紙を書くか電話をしていたという。その内容は彼の作品によかれと思われるものであったようである。

> I 'd write a letter with a teasing little anecdote to feed him some material when he needed it — including his last summer, when I wrote him a long letter that organized our life together from my point of view, hoping that it would give him incentive and motivation beyond what he already had to live and put his material in a novel. (Maryann Carver 90)

別居期間中もそうであったことは想像に難くない。また、娘の Chris Carver は彼がアル中になったときに家庭内でどのような振る舞いをしたかをかなりはっきりと述べている。

> There were some horrible scenes when he was drunk where he'd batter me up. [. . .] There were so many family problems that were

> directly related to the drinking that I moved out of the house when I was fifteen. (Chris Carver 85)

これは "Blackbird Pie" のナレーターが認めたくないと言っている事実そのものではないだろうか。だから、この作品は彼の家族に対する謝罪であり、書くことによって、つらい自己からの昇華であり別れなのであろう。その点からすると、"Call If You Need Me" にはそのようなある意味で鬼気迫るものはない。爽やかな別れが描かれている。このような作風には文学的傾向とは別の 70 年代という時代が反映していたようである。妻の Maryann Carver によると、70 年代は、酒におぼれて離婚は当然のことだ、新しい人生を楽しもうというという風潮があり、事実彼らもそういう仲間に取り囲まれていたと言う。

> The slogan was another wife, another life. Remember, this was the seventies. There was a lot of disillusionment — the me-first generation. Women's lib came into flower; women were wanting divorces. Ray and I seemed like the last holdouts. We were ridiculed by all sorts of people because we were still together — high-school sweethearts. (Maryann Carver 97)

この流れで考えると、"Call If You Need Me" の下絵となっているものが見えてくる。

5 おわりに

"Late Night with Fog and Horses" が最初の発想であり、次に短編 "Blackbird Pie" と "Call If You Need Me" が書かれた。短編の創作の順序も "Blackbird Pie" を残した Carver の意図も不明である。そして今回、Carver の意志に反して（このように人目に触れることは予想できたかもしれないが)、"Call If You Need Me" が発掘され、読者は 3 本の作品を読めることになった。三者を比較して読むことや、比較検討することは果たしてどのような価値を持つので

あろうか。作家がどのように作品を発想し、それをどのように展開し、読者に感動を与えるかは作品個々の力であって、同一テーマの作品を網羅して読む必然性はない。あるいはそれは不毛な作業であると言うこともできる。だが、一つの発想でどのような作品が生まれるものかを考えながら複数の作品を読むことは、Carver 好きはもとより、一般の読者を含めて、Carver-world の中ではあってもいい楽しみのジャンルである。そして、甲乙、好き嫌いを考えるのも楽しいことである。

詩が先にあって、そこから生まれる短編がそれぞれ独立した作品であるのは当然であるが、どれもが素晴らしい出来映えということはあるであろう。たとえば、ある小説から映画を作る場合、監督によって目の付け所、脚色に相違ができ、様々な時代に合うように解釈された映像作品ができあがるように。演劇でも同じ事が言えるであろう。あるいは『羅生門』の真実が定かでないことの面白さのように、今回の Carver の場合も “Call If You Need Me” が日の目を見たこと自体が快挙である。その点から、“Blackbird Pie” ではナレーターの現実逃避、ナレーター自身が自分の扱っている作品を把握し切れていないなど不明な点をあえて残すというメタフィクション的要素と効果、そこからくる奥行きが問題となる。ある意味でこれは玄人好みの作品になっていると言える。

“Call If You Need Me” は Hemingway 的色彩を含めて伝統的手法の佳作である。とにかく、“Blackbird Pie” の力みはない。放れ馬のシーンについては “Call If You Need Me” の神秘的治癒力を描く点で、詩にはその点は描かれているとしても不足であり、“Blackbird Pie” は到底かなわない。特に “Blackbird Pie” では手紙の謎解きに紙数が割かれ過ぎをどう判断するかによって評価が別れるであろう。このように、どうしても各作品を比較をしてしまうのである。三者を網羅して読むことや比較検討することは不毛であるとしても、同時に 3 種類の作品に目を通せるようになった現在、それは避けられないことかもしれない。この現実は Carver の世界を広げたことになるのであろうか。詩のジャンルで一つ、短編で一つ。これが同一テーマを扱う限度であると考えることもないであろう。現在 3 種類が存在する以上その事実に即しなければならない。さ

らに、これによって、メタフィクション的考察なども可能になったとすれば、Carver の世界が広がったことになるので、喜ばしいことである。しかし、どの作品もそれなりの鑑賞ができる単独に存在しているものであることを確認しておく必要がある。筆者は "Call If You Need Me" の読後感の爽やかさに好感を覚えていることを付記し筆を置く。

Notes

1 Tess Gallagher は *Call If You Need Me* の Foreword で

> The discoveries of these stories took place at different times and in different locales. The first occurred in March 1999 at Ridge House, the Port Angeles, Washington, home where Ray and I lived at the time of his death. Jay Woodruff, a friend and senior editor at Esquire, assisted me in this process. The second came that midsummer, when William L. stull and Maureen P. Carroll, husband-and-wife partners in Carver scholarship, when they visited the William Charvat Collection of American Fiction at the Ohio State University Library. There, while examining a box of manuscripts, they found two complete unpublished stories. They phoned me excitedly, on my birthday, with this news. (x)

と説明している。さらに、この原稿は Carver がその他のものと一緒にオハイオ州立大学に売ったものであることが *Granta* 68 の Introduction に次のように説明されている。

> They found them in the William Charvat Collection of American Fiction at Ohio State University; via a dealer, Carver had sold a job lot of his papers to the university in 1984. (7)

2 Tess Gallagher は "Call If You Need Me" の執筆年代を 1980 年代初期

としている。これは、Carver が原稿を売ったのが 1984 年と特定されているので、間違いないであろうが、Gallagher は *Call If you Need Me* の Foreword で次のように述べている。

> The two stories Bill and Maureen discovered date from the early 1980s, and both deal with the collapse of a marriage. One of them, "Call If You Need Me," anticipates a central image in the story "Blackbird Pie" and the poem "Late Night with Fog and Horses." In all three tellings, horses mysteriously appear through fog at a fateful parting. (xii)

3　この 3 つの版のテキストを比較してみると、*Granta* と *Best American Short Stories* の間に、さらに決定版である *Call If You Need Me* との間にはハイフンや句読点などを含め 40 カ所以上の細かな変更がある。

4　"Blackbird Pie" の初出は *New Yorker* (1986 年 7 月 7 日発行)。

5　"Late Night with Fog and Horses" の初出はオハイオ大学の *Ohio Review* 34 号 (1985 年発行) で、同年 *Tendril* にも掲載された。これらに掲載された 2 つと *Where Water Comes Together with Other Water* (1985) に収められた決定版とでは 6 カ所相違がある。

6　Carver は、詩を先に書き、そのあとで小説にすることを *Conversations with Raymond Carver* のインタビューで次のように説明している。

> I'm thinking of "Distress Sale" now, that poem, or the story "Why Don't You Dance?" the yard sale situation — the idea, the image of the yard sale made such a strong impression on me that I dealt with it first in a poem and then in a story. The same thing is true with regard to the poem "Late Night with Fog and Horses" and the story "Blackbird Pie." In each instance I wrote the poem first and then wrote the story, I suppose, because I apparently felt a need to elaborate on the same theme. ("Matters of Life and Death" 179)

7　Tess Gallagher は *Call If You Need Me* の Foreword で "Ray would

sometimes take a story through 30 rewrites. These stories had been put aside well short of that." (xi) と述べている。そのような厳しい推敲を経ていないことは確かであるが、"Still, very little editing was needed on these stories. Characters and place names were standardized, so Dotty didn't become Dolores a page later, or Eureka did not become Arcata." (xii) と付け加えている。Carver の推敲はかなり進んでいたようである。

8　作品が醸成されるまでの期間について、Maryann Carver は *When We Talk about Raymond Carver* なかで次のように述べている。

> He was always six years behind writing about reality that occurred. I was amazed, for instance, at how he could remember conversations he heard at a party and write about it six years later. It was consistent — six years, right down the line. It took him six years to process the material. (90)

この引用はまた "Blackbird Pie" のナレーターの記憶力についても暗示的である。

Works Cited

Carver, Chris. "Chris Carver." Interview with Sam Halpert. *Raymond Carver: An Oral Biography*. Ed. Sam Halpert. Iowa City: U of Iowa P, 1995. 77-88.

Carver, Maryann. "Maryann Carver." Interview with Sam Halpert. *When We Talk about Raymond Carver*. Ed. Sam Halpert. Layton: Peregrine Smith Book, 1991. 75-105.

Carver, Raymond. "Blackbird Pie." 1988. *Where I'm Calling From*. New York: Vintage, 1989.

---. "Call If You Need Me." *Call If You Need Me*. New York: Vintage,

2001.

---. "Late Night with Fog and Horses." *Where Water Comes Together with Other Water*. 1985. New York: Vintage, 1986.

---. "Matters of Life and Death." Interview with William L. Stull. *Conversations with Raymond Carver*. Jackson: UP of Mississippi, 1990. 177-91.

Gallagher, Tess. Foreword. *Call If You Need Me*. By Raymond Carver. New York: Vintage, 2001. ix-xv.

Jack, Ian. Introduction. *Granta* 68 (1999): 7.

Meyer, Adam. *Raymond Carver*. New York: Twain, 1995.

MURAKAMI Haruki. 「訳者あとがき」『必要になったら電話をかけて』東京：中央公論新社、2000. 177-94.

Nesset, Kirk. *The Stories of Raymond Carver: A Critical Study*. Athens: Ohio UP, 1995.

Runyon, Randolph Paul. *Reading Raymond Carver*. Syracuse: Syracuse UP, 1992.